Shimbashi Re:Charge Station

この建築で達成可能な「ゼロカーボンアクション30」

ゼロカーボンアクション30

- 環境保全活動に積極的に参加しよう！
  - 1 再エネ電気への切り替え
  - 2 クールビズ・ウォームビズ
  - 3 消費エネルギーの見える化
- CO2 の少ない交通手段を選ぼう！
  - 4 スマートムーブ
  - 5 ゼロカーボン・ドライブ
- エネルギーを節約・転換しよう！
  - 6 植林やゴミ拾い等の活動
- CO2 の少ない商品・サービス等を選ぼう！
  - 7 脱炭素型の製品・サービスの選択
  - 8 個人の ESG 投資

00 都市の補給拠点として成長した街：新橋

新橋は、1872 年に日本で初めて鉄道が開通したことから始まり、**列車による大量輸送の時代を切り開いた地**である。
馬車鉄道の開通や汐留貨物ターミナルの整備など都市の血流ともいえる物流の中枢・交通の要衝としての地位を固め、新橋は単なる交通結節点に留まらず、首都圏の産業と市民生活に物資やエネルギーを補給する**「都市の補給基地」**としての役割を現在まで継承している。

01 都市生活に求められる新しい豊かさ

■ ワークライフバランスが重視される時代

サラリーマンの街「新橋」は日々多くの労働者で賑わう場所である。近年、働き方や生活の仕方に対する価値観が変化し、ワークライフバランスが重視されるようになってきた。**プライベートの時間は、仕事のためのエネルギーチャージのための時間**でもある。心身の健康でいることが求められる社会において、運動や外出など**アクティブな時間の過ごし方は、心のリフレッシュに繋がる有意義な時間**となる。

■ 水素という新たな基幹エネルギーの選択肢

脱炭素社会の実現に向け、再生可能エネルギーの導入や二酸化炭素削減は重要な課題である。こうした中、東京都は「グリーン水素」を脱炭素社会実現の柱として位置づけ、取り組みを進めている。水素は酸素と反応することで**二酸化炭素を排出せずにクリーンなエネルギーを生み出す**ことができる。脱炭素社会の実現には、**水素を活用した豊かな都市空間の創出が不可欠となる。**

02 物資補給の場からエネルギーチャージの場へ

■ 水素生成の「水」が持つ可能性

再生可能エネルギーを利用して水を電気分解する「グリーン水素」を生成する過程の「浄水」は人間のチャージにも活用できる可能性を秘めている。チャージを求めるのはモビリティだけではなく、人間も入浴や食事などの**アクティビティを通じ、心身を回復させる「チャージスポット」**を求めている。仕事終わりや休日に心身をリフレッシュさせるアクティブな時間を水素生成を行うための水によって創出できないだろうか。

提案

■ 都市型水素ステーションの再構築

水素・水を用いた新たな商業施設を提案する。従来の単なるモビリティのチャージスポットではなく、平日・休日共に新橋と周辺地域のポテンシャルを活かし、人間も心身共にチャージできる場を設けることで、**水素・生成の過程を活かした新たな建築・ライフスタイル**を提供する。

03 水素を用いたエネルギーチャージの場の在り方

■ 人の営みが水素を作り出す

水を浄水し、その水と再生可能エネルギーを用いて水素を生成する。人々のチャージスポットである銭湯やプールなどの利用者が多い程、利用される水量は増加する。**人が使った水が燃料やより良い都市空間の創出に繋がる。**

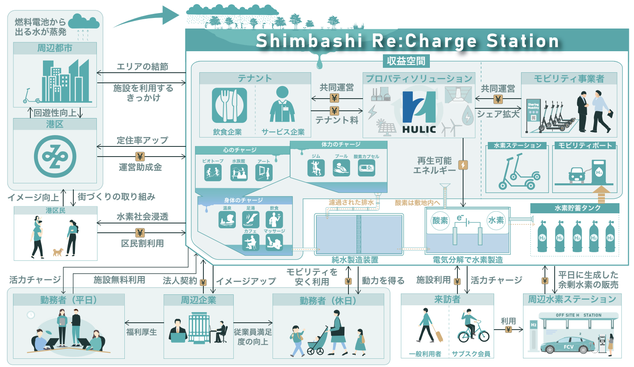
■ 人とエリアを繋ぐハブとして機能する建築

平日は仕事の活力チャージの場所として使われる。休日には、本施設で充電されたモビリティを活用し、**周辺に点在している銀座や汐留といった観光地を繋ぐハブとしても機能する。**

水の純度によるフロア構成

浄水が重要な機能を低層階に配置。雨水を利用し、**上層階から徐々に水が浄水**され、心身のチャージをしながら水素生成の過程を体感できる。

04 水素モビリティ・周辺都市を巻き込んだ事業計画



周辺企業との法人契約やテナント料、来訪者からの利用料を軸に事業を展開していく。多様なワークスタイル合わせた利用形態により、利用促進を図る。そして、**水素モビリティ・銀座など周辺の街と連携することで、水素のシェア拡大、銀座や汐留など新橋周辺を点ではなく、面的に強い街へと成長させる。**

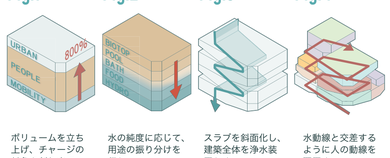
ワークスタイルに合わせた利用プラン

サブスク
月額料金を支払い、核施設を定期的に利用する、新橋を乗換駅として利用する層を主なターゲットとし、乗り換えついでの利用や、ここから水素モビリティに乗り継いで帰宅する行動を促す。

都度利用
各施設およびモビリティを時間単位で利用する。利用時間に応じたポイントが付与され、施設・モビリティの双方で利用できる。観光、周辺回遊をモビリティで行い、電車やバスではなく、モビリティを使うきっかけを生む。

法人利用
企業単位で契約し、社員のウェルネス向上と水素モビリティ利用の促進を図る。契約企業の社員は施設を利用可能とし、動務日に獲得したポイントは休日にモビリティで利用できる。

05 建築ダイアグラム



ボリュームを立ち上げ、チャージの対象を割り当てる。

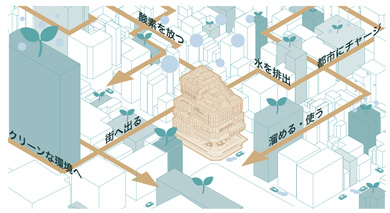
水の純度に応じて、用途の振り分けを行う。

スラブを斜面化し、建築全体を浄水装置とする。

水動線と交差するように人の動線を配置する。

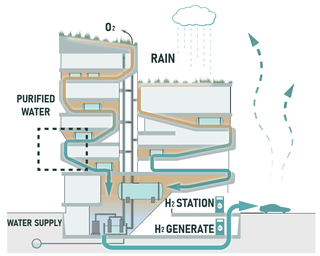
必要な水の純度に応じて用途を振り分け、スラブを斜面化したことで建築全体が浄水装置となる。**水動線と交差した人の動線により、水素生成の過程が可視化された建築を提案する。**

06 水素から始まる都市循環

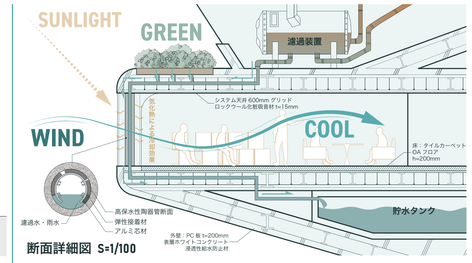


排出された水や酸素がヒートアイランド現象を抑制し、建築に戻る循環を生む。本提案をきっかけに**水素が普及し、都市にチャージされたクリーンな環境が人のチャージにも繋がる。**

07 水の流れが生み出す環境建築

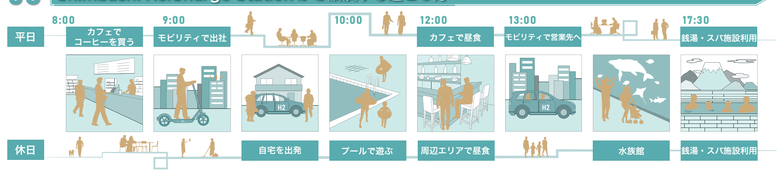


雨水の利用から水の循環動線を配置する。建築内を循環し、浄水された水を電気分解・水素生成・利用までの環境循環システムを計画する。

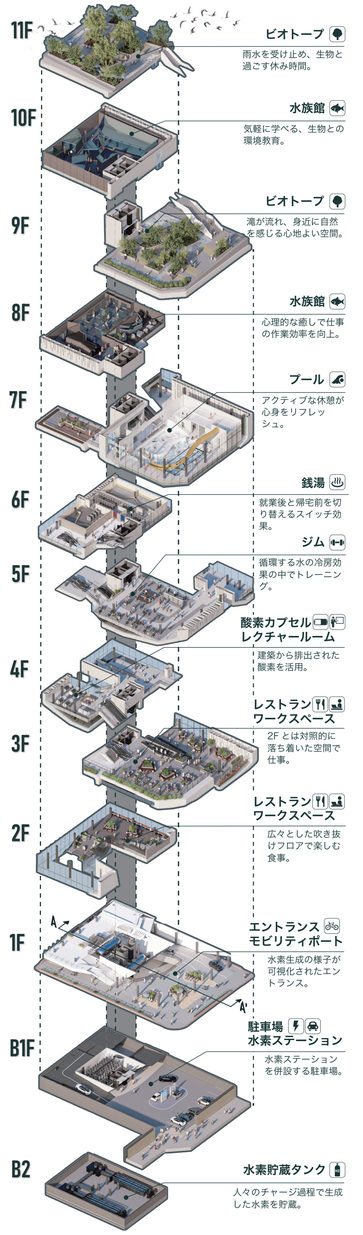


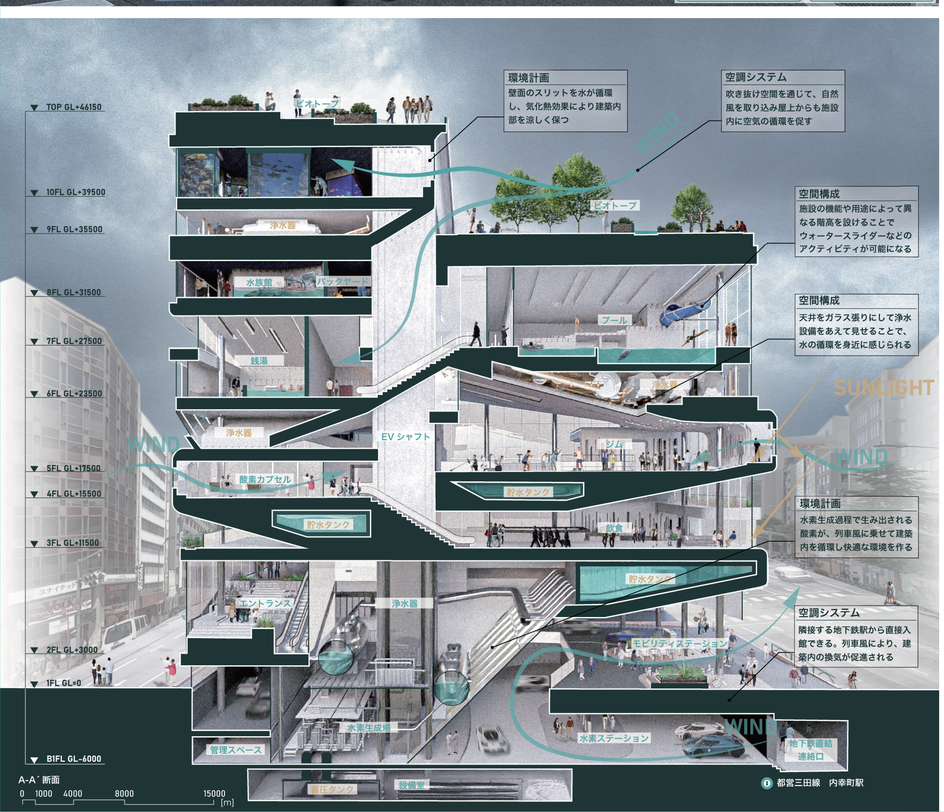
建築内を循環する水は、**植物への利用や壁面を通る際に気化熱による冷却効果を獲得**し、貯水タンクへと向かう。これらの循環は**ゼロ・カーボンアクション 30 の達成に貢献する。**

08 Shimbashi Re:Charge Station から波及する過ごし方

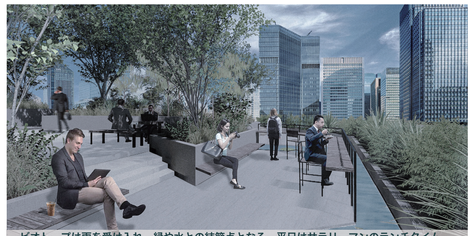


09 フロアガイド

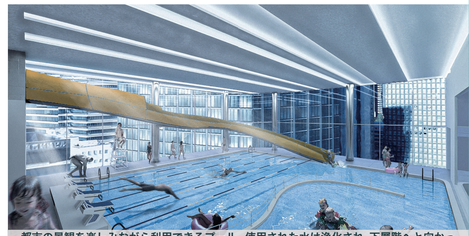




浄水装置の間に生まれる吹き抜け空間は異なる分野や機能が交差し、新たな繋がりを生み出す場となる。また、壁面のスリットからは冷却された空気が緩やかに流れ込み、訪れる人々に心地よい涼しさと安らぎの時間を提供する。



ビオトープは雨を受け入れ、緑や水との結節点となる。平日はサラリーマンのランチタイム、休日は来訪者の憩いの場として機能する。



都市の景観を楽しみながら利用できるプール。使用された水は浄化され、下層階へと向かっていく。平日・休日共にアクティブな過ごし方を誘発する。

水素生成の様子が可視化されたモビリティステーションは建物のエントランスの役割も担う。この場所を起点とし、周辺の観光地を結ぶハブとなる。

水素モビリティによって周辺観光地とを繋ぎ、移動することが活力を生み出す。

水素モビリティが街中に設置され、クリーンな環境の創出が都市や人間のチャージの源となる。